日本記者クラブ
「戦後70年　語る・問う」(41)

保守は大東亜戦争を肯定できるのか

中島岳志

2015年12月15日

真の保守とは何か。中島氏は、エドモンド・バークの思想を基に、「人間が不完全な存在であることを認めて、歴史の風雪に耐えてきた慣習、伝統、良識に依拠して社会を考えるのが保守主義」と説く。そして、「保守とは、永遠の微調整である」と定義づけた。

近年、「保守派」を自任する人たちが、先の戦争に対し肯定的な態度を示すことがあるが、中島氏は「これは保守的ではない」と一刀両断した。その根拠として、田中美知太郎、竹山道雄、山本七平ら、大人として戦争を体験した保守派論客たちが示した戦前の超国家主義体制に対する嫌悪感をあげた。彼らは、戦前右翼に対し、リアリズムを欠いた非合理的な「国体」論を振り回して国家を誤導した、と強く批判している。同時に、戦後左翼についても、「『平和』を神聖な観念に祭り上げて自己同一化し、自分たちの絶対性を押し付けようとした。これは戦前右翼の『天皇』を『平和』に置き換えただけで、両者は同根の存在である」とも主張している。

日本では、「リベラル＝革新」との等式が流布しているが、40 歳の気鋭の政治学者である中島氏は、自身の政治的立場を「リベラルな保守」と位置付ける。

「リベラルをその原意である『寛容』に戻すべきだ。そういうリベラルを擁護する感性を強く持っているのが保守です。私は、本来の保守と本来のリベラルを取り戻したい」

司会：星　浩　日本記者クラブ企画委員（朝日新聞）
YouTube 日本記者クラブチャンネル
https://www.youtube.com/watch?v=Iq_C70IEEeU
©公益社団法人　日本記者クラブ

司会　星浩・企画委員（朝日新聞特別編集委員）
日本記者クラブでは、「戦後 70 年」の企画を続けており、もう最終盤に入っております。きょうはシリーズ 41 回目です。いろいろな方に硬軟取りまぜて出ていただいているんですが、きょうは、新進気鋭の政治思想研究者である中島岳志さんに来ていただきました。テーマは「保守は大東亜戦争を肯定できるのか」です。私は当クラブの企画委員、朝日新聞の星でございます。

中島さんは、1975 年生まれの 40 歳で、少なくともこの部屋ではおそらく一番若い方だと思います。いまは北海道大学で教鞭をとられており、テレビのコメンテーターなどでも弁舌爽やかなコメントをされておられます。

それでは、中島さん、よろしくお願いいたします。

あいまいな「保守」の定義

中島　ご紹介をいただきました中島と申します。よろしくお願いいたします。

前回、日本記者クラブでお話をさせていただいたのは 10 年前だそうです。私が 30 歳で、ちょうど『中村屋のボース』という本を書いた直後ぐらいにお話したようです。40 歳で若いとご紹介いただきましたが、30 歳の私はもっと若くて恐れるものもなく、もうちょっと簡単な格好で来ていたのが恥ずかしく、先ほど赤面したところでした。

今日、お話をさせていただきますのは、保守と 70 年前の戦争についてです。なぜ私自身がこういうテーマでお話をさせていただこうと思ったかといいますと、保守という概念がどうもインフレ状態にある。みんながみんな保守だ、保守だと言い始めて、保守というものの輪郭、フォルムというものがどうもわけがわからなくなっているのではないか、そういう思いが非常に強くあるからです。

保守というのは一体、政治学からみるとどういう概念なのかから整理をし、そこから戦争、あるいは歴史認識の問題について考えてみたい、というのがきょうの趣旨でございます。

「保守」という言葉ですけれども、基本的に、政治学にしろ、あるいは社会学にしろ、少し厳密に定義をしなければ、この言葉というのは非常に曖昧になってしまうと言われています。なぜならば、一般的に「保守」という言葉を使うと、例えば家の隣に突然よくわからない人が引っ越してきたとなると、私たちは恐れたりとか、あるいは全く行ったことのない初めての海外の空港に一人おり立つと不安に思ったり、こういうような感情というのは人間の共通した感情で、それがある種の保守性というものだろうと思います。

あるいは、例えば朝御飯は日本人だったら納豆と白米、それからみそ汁じゃないと何か落ちつかないというと、「うちのお父さん、保守的ねえ」というふうに言う。この場合の「保守」は、政治で言う保守主義とか保守思想というものよりは、もっと広い言葉として使われている「保守」であります。

政治学あるいは社会学においては、一般的な、全人類が抱えているある人間の性質のような保守とは分離させて、保守主義とか保守思想というのを使うようにしております。

では、どういうふうなものが保守主義とされるのかといいますと、近代の、特にフランス革命が起きたとき、それに対してアンチテーゼとして出てきた一つの思想潮流というものを、基本的には近代保守思想あるいは近代保守主義というふうに定義をしています。

その立役者といいましょうか、原点になるのがエドマンド・バークという人の『フランス革命の省察』という本であります。

バークが一体どういう点でフランス革命を気に入らなかったのかということがここでポイントになろうかと思います。

フランス革命を支えたいわゆる左派的な思想というものは、理性によって世の中をよくできる、人間の理性の力によって進歩した社会というものを構築できる、人間の努力で世界を、平等で良き社会をつくることができるという発想です。これに対して、バークは異議を唱えたわけです。

「人間の不完全性」を認める

その根本にまずあったのが、人間観でした。左派の近代主義的な人間観は、理性の無謬性のようなものを掲げました。これに対し、バークの主張は、人間というのはそんなたいしたものなのか、どんなに優れた人間であっても、倫理的にも、あるいは知的にも不完全性というものをどうしても帯びている、それが人間ではないか、ということです。

どんなに立派な人だって、エゴイズムというものがどこかしらにあったり、あるいは人のことをやっかんでみたりとか、そういうものをどんな倫理的な人間であっても拭い去ることはできない。あるいはどんなにＩＱが高く知的な人間であっても、世界全体というものを正しく把握し、そして未来を完全な形で予測することはできない。とするならば、私たちのこの理性や知性というものには一定の限界がある。人間というものは不完全な存在であるということを謙虚に認めるところから人間観をスタートさせる、というのがバークの言ったことです。

では、何に依拠して社会というものを考えていくべきなのか。バークは理性を超えたものの中に人間の非常に重要なものの本質があるのではないか、と考えたわけです。理性を超えたものとは一体何なのか、それは長年多くの人たちのフィルターにかけられてきた、歴史の風雪に耐えてきた慣習や良識や、あるいは伝統のようなもの、あるいはヨーロッパの中では、キリスト教の原罪という観念が非常に重要になっていますけれども、そういった神の概念、こういうものが非常に重要であるとバークは考えたわけです。

といっても、世の中はどんどん変化をしていくので全く何も変えないというのではなくて、そういった長年のフィルターにかけられて残ってきたものに依拠しながら、グラジュアルに、徐々に徐々に変えていくという漸進主義的な改革というものが本質的なあり方なのではないか。

ですから、保守は革命を嫌うわけです。ある特定の人間が理知的に机の上で書いた設計図に基づいて社会がうまくいく、などというのは基本的には思い上がりである。理性に対する思い上がりである。それは不可能なんだ。それよりも長年の経験知に基づいて、徐々に徐々に変えていく、そういうものがしっかりとした地に足のついた改革ではないか。ですから、バークは「保守するための改革」という言い方をしています。

ですから、保守というのは、実は復古でも反動でも進歩でもない、というのが非常に重要なポイントになってまいります。復古というのは過去に戻れということですけれども、例えばイスラムの、最近騒がせているイスラム国などは、やはりムハンマドの時代というものを「無謬の時代」というふうに想定し、あの時代に戻ればいいんだ、あの時代以降にいろんな余計なものが入ってきたからイスラムはおかしくなったんだ、例えばイスラムの内部でも、スーフィズムのような伝統に対して、彼らは非常にネガティブな観念を持っていますけれども、そういうものを除去して原点に返ろうというのが原理主義であるわけですけれども、あるいは日本の右翼思想というものをおおよそそういうものでありますが、そういうような復古というものを保守はとりません。なぜならば、過去においても人間が不完全であった、と認識するからです。不完全な人間は不完全な社会しかつくることができない。とするならば、過去には、過去の問題があった、ということを冷静にみるわけです。

保守とは「永遠の微調整」

あるいは反動というのも、実は保守はとることができません。反動というのは、やはり動きをやめてしまう。そのまま現状を抱きしめるということになろうかと思いますが、当然のことながら、現在生きているわれわれも無謬の存在ではない、不完全な存在である以上、私たちは徐々に徐々に変えていかなければならない。

そして未来も、残念ながら、完成することはないであろう。

ですから、保守というのを一言で言えという

ふうに言われると、私はこういうふうに言っています。「保守とは、永遠の微調整である」と思うわけです。このことを政治家として戦後の中で最もよくわかっていらっしゃったなと私が思うのは、大平正芳さんです。大平さんというのは、全ての決定というのを全て暫定的なものである、という言い方をしています。常に、これが完成された絶対の答えなどというものは、政治的には存在し得ない、常にその時代その時代の暫定的なものであり、多くの社会というものが変容していくと、それに合わせてボルトが緩んできたら、それを締めるように変えていくこと、というのが冷静な保守というものである、というのが大平さんの考えでした。そういうようなものが私にとっての保守思想というものであるわけです。

頭でっかちで、設計主義的な合理主義、特定の人間の思想に基づいて、これで革命をやれば全てうまくいくんだという、ある種の共産主義のような考え方に対して距離をとったというのが保守の思想であり、保守は、そういうものに対する根本的な疑いを持ってきたと私は思うわけです。

そうしたものを保守主義、保守思想であると定義するならば、私は、あの 70 年前の大東亜戦争というものに対して疑義が生じてくるわけです。保守思想の観点から疑義が生じてくるわけです。

大東亜共栄圏は非保守的発想

それは一体どういうことなのか。簡単に申しあげるならば、例えば満州事変でありますけれども、満州国をつくり、そこで五族協和、王道楽土をつくろうというような、あるいは人類の普遍的なユートピアをつくろうというような発想というのは、保守からはどうやっても出てきようのない思想であるわけです。あるいは、八紘一宇によって天皇陛下のもとに世界を統一する、などという発想も、あるいは大東亜共栄圏などという発想も、保守の中からは出てきようのないものではないか。

現に、戦後の保守政治を率いた一人である石橋湛山などは、そういうものに対して非常に批判的で、距離をとっていた人でありますし、当時を主体的に生きた、戦後も生きていた保守の思想家たち、言論人たちというのも、やはり大東亜戦争に対しては、一定の、非常に強い距離をとっていた人たちでした。このことがいま忘れられてはいまいかというのが、この後にお話をさせていただきたいことであります。

今年は戦後 70 年ということで、今日の会もも戦後 70 年をテーマとされているとお伺いしました。戦後 70 年というのは一体どういうことを意味しているのかと申しますと、これは大東亜戦争勃発時に20歳だった人が現在94歳であるということです。

つまり、凄惨な戦地での体験を有する人というのが、実はほとんどといいましょうか、かなりの部分、鬼籍に入られているというのが戦後 70 年の状況なんだろうと思います。つまり、現在の言論人の中で、戦争体験があるといろんな形で語られる方というのは、それは戦場での体験ではないのですね。戦争体験のうち空襲の体験というものが非常に多くを占めるようになってまいりました。

つまり、あの戦争時に思想がある程度形成をされて、それに対して主体的な判断ができるような年齢に達していた人たちというのが、いまもう 90 代になっているということです。これは一体どういうことなのか。そして、その多くの人たちももはや鬼籍に入られているということであります。

例えば、私、この年代というのは非常に重要であると思っているわけですが、例えば、戦後活躍をされ、私も大変尊敬をしている田中美知太郎さん。田中さんは 1902 年生まれでありますから、大東亜戦争の勃発時、39 歳であります。

竹山道雄さんも後でじっくりとお話をしますが、東大の教養学部で教え、『ビルマの竪琴』を書かれ、戦後の保守を代表する人物であります。竹山さんは、戦争勃発時は 38 歳です。

池島信平、この人は文藝春秋の 3 代目の社長であり、雑誌『諸君』などを立ち上げた人物で

す。彼の『雑誌記者』というのは非常に名著だと私は思っておりますが、彼も戦争勃発時は32 歳です。福田恆存さんが少し若く、勃発時29 歳でした。

戦争に実際に行ったのが会田雄次さんです。私がぎりぎりお目にかかったことがあるのは、このあたりでは会田さんだけですけれども、会田さんは1916 年生まれで、勃発時25 歳です。中公新書が出版された当初に、『アーロン収容所』という非常に多く読まれた本を書かれた。ビルマ戦線に行かれた方であります。

山本七平さん、この方も後でじっくりとお話をいたします。山本さんもフィリピンに行かれましたけれども、山本さんは20 歳で、大東亜戦争の勃発を迎えるわけです。

この方々は皆さん、おおむね80 年代から90 年代に鬼籍に入られております。ですから、私がさまざまな勉強をし始めたころ、90 年代の半ばからいろんな学問に私は足を突っ込んでいくことになりましたが、そのころにバタバタとお亡くなりになられたというのがこの方々でありました。

96 年には、左派のほうでも丸山眞男さんが亡くなられたり、近年になると、吉本さんや鶴見さんという方々がお亡くなりになったりする、そういう状況が続いているわけです。

現在の保守派論客、戦中は子供

一方で、現在の保守言論界の重鎮とされる方々というのは、一体どういう年代の方なのかといいますと、例えばおそらく最高齢に近いところにいらっしゃる渡部昇一さんなどは 1930 年生まれですから、大東亜戦争勃発時は11 歳です。

例えば、江藤淳さんはもうお亡くなりですけれども、江藤さんは9 歳でした。西尾幹二さんは6 歳です。私が大変お世話になっている西部邁さんは2 歳であるわけです。この方々は確かに戦争は体験されています。しかし、戦争を主体的に体験されたと本当に言えるのかという問題があります。おそらく、この戦争に対する語りは、戦後、ご自身の思想を形成された後から逆算されて抽出された戦争体験ではないのかと思うわけです。

田中美知太郎さんにしろ、竹山さんにしろ、戦争中にもう文筆家として物を書いている方です。こういう方たちと、おそらく渡部昇一さんなど以降の保守言論人というのは、戦争体験の間には大分ずれがあるというふうに思ったほうがいいのではないか。

つまり、大東亜戦争を主体的に体験したという保守言論人というのは、もうほとんど生きていないということです。そのことを念頭に入れ、90 年代、80 年代にどんどんと鬼籍に入られた方たちは、大東亜戦争についてどういうことを述べていたのかをいま振り返っておかなければならない、というのが私の考えていることです。

この方々のうち、福田恒存さんは最近よく読まれていますし、小林秀雄などはずうっと読まれていますけれども、他の方々、例えば、田中美知太郎とか竹山道雄というのは最近、聞かないなという方が多くいらっしゃるかもしれません。私もこの方々の著作を読んでいると、「君は忘れられた人たちの本をよく読んでいるね」と言われるのですが、私にとってはこの方々は非常に新鮮なのです。非常におもしろいです。非常に豊かな著述をされており、私にとっては非常に勉強になる方々であります。

前振りはこのあたりにして、具体的な内容に入ってまいります。

まず田中美知太郎と大東亜戦争という問題であります。

田中美知太郎さんは、ご承知のとおり、長年、京都大学で哲学を教えてこられた先生です。京都大学の哲学というと、西田哲学というのが非常に強く念頭にありますが、田中さんは西田哲学をどちらかというと退けられた方です。京都大学に西田ファンのような人たちが集まってくることを、どちらかというと毛嫌いされた方が田中さんでした。

田中さんの主著はプラトン研究で、古代ギリシャ哲学が専門でした。田中さんは『時代と私』という回想を残しております。これは『諸君』

に創刊直後から連載されていたと記憶しています。文藝春秋から出ており、非常に重要な本です。

軍政に強い嫌悪感、田中美知太郎

田中さんはどういうふうに自分の若き日々を回想されているかといいますと、彼は 1936 年以降の 5 年間、つまり 2.26 から大東亜戦争の勃発までの 5 年間、この 5 年間は「二度と繰り返したくない最悪の時代だった」というふうに明言をされています。どういうことか。

きょうは、できる限り地の文章から、たくさん引用しようと思います。

田中さんはこう書いています。「二・二六事件以後五年間の日本は、およそ愚かしいこと、不正なことのすべてが行はれ、日本の運命が暗く閉ざされて行った五年間であり、それから後の四年間は要するにその結果を刈り取っただけのことである」と。二・二六以降の 9 年間、大東亜戦争の終戦までというのは日本の最悪の時代である、そういう認識というのがまず彼にはあるわけです。

1920 年代末には、彼は幣原外交に非常に期待をかけていました。この自由主義的な流れが日本の非常に重要な底流になってほしいと考えていたが、そうならなかった。これを彼は非常に強く嘆いています。

「自由主義のポテンシャルが消滅して行くプロセスこそ、昭和初期の政治であったのではないのか」と彼は述べています。

彼は、軍閥や軍政というものに対して非常に強い嫌悪感を述べています。軍閥による「圧制」というものは「愚昧な暴力支配」というふうに書き、彼は嫌悪感を露骨に示しております。

特に田中さんが嫌ったのは、この軍閥が国体というものを振りかざす、その無内容さにありました。軍閥は、利己的な欲望を追求するために国体論を使っている、この「国体」論によって巧みに欲望というものを上書きし、権力を占有する、そういう装置であり勢力である、と彼は述べています。

具体的な文章を引用します。

「わたしたちが昭和の軍閥をにくむのは、かれらがその知識的限界あるひは自己の利己的動機について、いささかも反省することなく、みだりに皇道だの大義だの国体だのと、当時の美名を偽善的に濫用し、政治に従ふべきかれらが逆に政治を支配し、その結果は大失敗となり、全国民にあらゆる苦難をなめさせたからであらう」。

軍人の乱用している国体論は一体どういうものか。それはあくまでも「天皇の権威を流用した自己正当化」にほかならない。「絶対的な言動」というものを手に入れるための方法であった。「かれらの心理からすると、彼らに対して批判的な言動があれば、それがつまり天皇の神聖を犯し、国体を破壊したといふことになる」。つまり、軍閥、軍部に対して批判的な人間が出てくる、それに対する批判的な言論が出てくると、「何だ君は！国体、天皇陛下が大権を持っているのであるぞ、軍部に対して何を言っているのか、おまえは国体を汚そうとしている人間か」、という批判がなされる。結局、それは自分たちの正当化に天皇を流用しているのが軍部ではないか、というのが田中美知太郎が 20 代から 30 代に思い描いていた当時の軍閥に対する嫌悪感というものでした。

さらに、田中美知太郎だけではないですが、保守主義者たちというのは、戦後も当然のことながら、言論活動していきます。この人たちに共通する非常に重要なポイントは、戦前戦中の軍人と、戦後の平和主義者というのは共通しているという観念なのです。両者は同根の存在である、というふうに保守主義者はみなし、自分はどちらに対しても嫌悪感を抱く、というふうに彼らが主張しているところ、これが非常に重要なポイントであります。

戦後の左派は、戦前の軍閥と同じ体質

田中さんは、戦後の左派を次のように言っています。彼らは結局、軍閥と同じであると。「反戦」や「平和」というものを神聖な観念に祭り上げ、これと自己同一化することで自分たちの

絶対性を主張しようとする言論活動にほかならない。「天皇」が「平和」という言葉に変わっただけじゃないか。それによって無謬の存在として自己を位置づけようとする、そういう体質や構造は、実はあの軍閥と戦後の平和主義者に共通している土台である。自分はどちらも支持できない、というのが田中さんの戦後の言論であったわけです。

統制派の軍閥も、あるいは皇道派の青年将校も、戦後民主主義者も、絶対的な正義を掲げることで自己の立場を獲得しようとする「粗雑な心理」の持ち主であると、非常に厳しい言葉だと思いますが、田中美知太郎はこのように批評をしております。

ですから、田中さんは戦中、自分は非常に孤独であったということを回想されています。さらに、田中さんは、顔に非常に大きなやけどを負っていらっしゃいました。それは彼が戦中に焼夷弾によって大やけどをされ、そのためにできた大きなあざでした。それが田中美知太郎の戦争体験にとっても非常に大きかったのでしょう。一命はとりとめたものの、一目でわかる非常に大きなあざが顔に大きく残ることになりました。

「戦争中のわたしの立場といふやうなものは、全く孤独なものであつたと言ふよりほかはない。比較的自由に時局談することができる相手としては、ただ一人三木清があるだけだったけれども、これも十七年はじめに陸軍宣伝班員として、フィリピンへつれて行かれてしまつたので、その後は誰も話相手がなくなってしまった」。三木は、その後、獄中に入り、獄中で戦後すぐに亡くなりました。

私はこの文章は非常に重たいといいましょうか、しみじみと田中さんらしいなと思います。彼はこう述べています。

「単純な愛国者になることのできない自分自身を悲しみ、身軽に時局に便乗する人たちの軽薄さを羨みさへした」というのです。あいつらはいいな、軽薄でいいな、みんな「戦争万歳」と言っている、いいな、あんな人間になれたらどれだけ楽だったろう、これが田中さんの実感だったわけです。俺は孤独だ、こんな戦争にくみできない。

しかし、アメリカにも彼は与することができないわけです。どれも気に入らない。では、俺はどうしたらいいんだ、という孤独を彼は抱え込む。そして、そんなことを言おうものならしょっ引かれてしまう。一体俺はどう生きればいいのか、と彼は思ったわけです。ですから、彼は論文を書くことに専念しようと考えました。しかし、内容をめぐっては、当然言論統制という制約を気にせざるを得ず、非常に陰鬱な気分にとりつかれることになりました。

岩波書店が彼の一つの舞台だったんですけれども、岩波茂雄から「田中さん、最近、暗い顔をしているね」と言われて、明るく振る舞っていたはずなのに、岩波茂雄には見抜かれた、というふうに書いています。そういう陰鬱な気持ちが彼の中にはずっとありました。

彼は大東亜戦争のイデオロギーに同調することがどうしてもできない、と考えていたわけです。アジアの解放、それを聖戦だというふうに言われているが、そんな大義は、「日本の専業」ではなく、中国の蒋介石やインド国民会議派がそれぞれの国で独自に遂行する方が自己矛盾が少ない。彼は、それぞれの国のナショナリズムというものを、あるいは独立運動に至っていく主権要求というものを冷静にみているわけです。そして、そういうものがそれぞれの国家の独立をなし遂げ、それぞれの民族の力によって新しい国家づくりをしていくだろう、それがひいてはアジア全体が植民地から解放されていくという道筋にほかならない。それは日本の専売特許のようなものではありませんよ、そういうふうに述べています。

次の文章も私は好きで、よく引用します。

「わたしは戦争一般とか、あるひは戦争目的について、一般的な抽象論の立場で否定の結論を出したわけではない。むしろもつと具体的に、この戦争が日本国民のためにならない戦争であり、満州事変以来の愚昧と不正の国内政治から生まれて来た不始末のやうなものであるから、これを容認できなかつたのであり、一刻も

早く中止すべきものと考へただけのことであると言へば、まあ大体は当つてゐるのではないだらうか」と田中さんは述べています。

しかも、彼は東条内閣に対して非常に厳しいです。東条内閣は、「カキストクラシー（劣悪者の支配）のうつてつけの見本」であるというふうに彼は言っています。この背景には、彼がプラトンの研究者だったというのが非常に強くあると思います。

民主制、あるいは衆愚政治というものに対して、田中さんは非常に厳しい言論をされた方でありました。ですから、60 年安保のときも、民衆に対して非常に厳しい言葉を投げかけました。「常識に帰れ」と言ったのは福田恆存ですが、田中美知太郎も同じでありました。

田中さんはこうみています。民主政治は「劣悪者」を指導者に選ぶと、途端に「最悪の独裁政治に転化」してしまう。独裁政治というのは「組織の末端においてはどんどんと愚劣さというものが倍加」していく、そのために国民は更なる劣悪な状況に置かれていく。しかし、戦時中の国民は、そんな状況に置かれながらも、軍部に対してさしたる反感も示さず、戦争の行く末に対する楽観ばかりが支配していた。そうした同時代に対する嫌悪感というのが彼にはあるわけです。そういうのはやっていられん、というふうに思いながら、彼はプラトン研究をずっと進めていったわけであります。

「わたしの立場は、このやうな愚かしい国内政治を容認し得なかつたために、それの不始末としての戦争にも反対だつたのだといふことになるだらう」と述べております。

そして、彼は 1945 年 8 月 15 日を当然喜ぶわけです。敗戦の決定というのは、「わずかでも残された理性の一片」による「最後の正気の政治的決断」というふうに評価しています。

鈴木貫太郎などの決断、あるいは昭和天皇の決断というものを彼は非常に高く評価をしています。「狂気の時代」の終焉は「少数の和平派の忠誠心と愛国心、勇気と慎重の行動によつて、辛うじて達成された」。よかったと言っているわけです。

しかし、次のところが田中さんの好きなところであり、保守の一つの醍醐味だと思うのですけれども、田中さんはこうも言うわけです。「戦争に反対した者――例えば共産党の宮本顕治にしろ、あるいは徳田球一にしろ、こういう反対した者が、戦後になって容易に英雄視される風潮」、これもまた気に入らないというふうに言うわけです。それどうしたんだ、と言うわけです。

そういう風潮に対し、彼は非常に嫌悪感があったために、自分が戦争に反対だったということを晩年になるまで語りませんでした。そういうことをわざわざ言うことは恥ずかしいことだと彼は思っていたんです。そういうことを一々言うやつというのは、みっともないやつだ、というふうに彼は思っていた。

自らが戦争に反対だったことを伏せ、「戦争中と逆の手柄話や自慢話」を繰り返す人たち、これを彼は徹底的に退けていきました。俺は反対だったんだ、そもそもおかしいと思っていたと言っているやつは、大体戦争に賛成していたやつだ、ということを彼はよく知っているわけです。

「負けに乗じる」人間に反感、池島信平

これは池島信平が同じことを書いています。池島信平が『雑誌記者』の中で、戦争中に非常に嫌な空気が文藝春秋の中にあった。『古事記』を持ってきて、突然、朗々とそれを読み上げているやつたちがいた。そして、池島たちはそういう連中から白い目でみられるわけです。国体論をちゃんと掲げていない不純なやつたちだ、というふうに言われる。池島は、「何だ、こいつら、気持ち悪い」と思っていて、彼は戦争中海外ではなく、北海道に送られて千歳空港をつくっていたのです。私、千歳空港を週に 1 回か 2 回使いますけれども、そのたびに池島さんを思い出して、池島さん、ここで苦労されたんだなと思います。

戦争が終わって、文藝春秋を彼は立て直すわけですけれども、嫌な空気を感じるんですね。ああ言っていたやつが、今度は裕仁の首をくく

れとか、切れとか、あるいは東条が何だとか言い始める。「何だこいつら、気持ち悪い」とまた思っていたときに、彼は（『文芸春秋』の）巻頭言を長谷川如是閑に頼むんです。長谷川如是閑は何と書いてきたのかというと、「敗けに乗じる」という文章を書いたのです。これは名文です。

如是閑は、人間の中に汚いやつがいるというのを自分は知っている。勝ちに乗じるやつというのが多くいるのは知っている。しかし、この国民は何であろうか。敗けに乗じているではないか。戦争中に万歳と言っていた人間が、いけいけと言っていた人間が、戦後になると、ころっと手の平を返し、あの戦争は間違えていたと前から思っていた、というふうに言い始める。あの敗けに乗じるやつたちというのは気持ち悪いね、という文章を書いているわけです。それをみて池島は、そのとおりだ、本当に自分の思っている気持ちというのを代弁してくれた、こう考えて、『文藝春秋』というものを戦後スタートさせ、その延長上に『諸君』という雑誌を立ち上げていくことになります。

平和主義というものに突然飛びついた戦争中の万歳を言っていたやつというのを、池島さんは横目でみながら、あんたたちがそういう魂胆なんだったら、俺は保守派でいってやろう、というふうに思ったと書いているのです。これが保守の気概というものなんです。こういうものが忘れられているのではないのかと思うわけです。彼らは戦中も戦後も信じられなかった。両方とも同じ人間が担っていたということをよくみていたからです。

田中美知太郎さんは「わたしはこの種の話をあまりしなかつたし――つまり戦争反対だったということです――今でもさういふ話をするのは好きではない。そこには何かわたしの気持ちに合はないもの、さからふものが感じられるからだ」と述べています。私は、非常にすがすがしい言葉だなと思います。これが保守の矜持のようなものだったんだろうと思います。

繰り返しになりますが、戦争中に声高に国体を叫んだ人間と、戦後に平和を叫ぶ人間は同根の存在である、ということを彼らは見抜いておりました。

「設計的思想」で一貫、下中弥三郎

ことしの春、私、下中弥三郎という人物の伝記を書きました。下中弥三郎は平凡社の創業者ですけれども、平凡社が 100 年を迎えたことから、その平凡社から、伝記を書いてくれと頼まれて書いたものですが、創業者の偉人伝を書くつもりは全くなくて、下中弥三郎が非常に典型的な、私が議論したい重要な思想潮流の中にあった人だと考えて、これを書きました。

なぜかというと、下中弥三郎という人は、1920 年代には労働運動の先端に立った左派的な運動家でありました。1920 年代の後半、大正期の終わりぐらいには、自由主義教育というものを立ち上げ、「池袋児童の村」というのを立ち上げた一人です。ここでは先生と生徒というものの区別をなくす、あるいは時間割をなくすとか、非常にラディカルな教育改革をやった。現在でも、「大正期の自由主義というものが花開いた教育運動」と評価をされるものですが、それを行ったのが下中弥三郎です。

しかし、彼は 1930 年代に入ると、強烈な超国家主義者になっていきます。全世界が一体化した平和な社会というものをつくるために、日本は戦わなければならない、日本の国体による世界の統一的なユートピア、これこそが重要であると。非常に強烈な八紘一宇思想というものが彼が示したものでした。

しかし、敗戦になる。その直後、彼は何を言い始めるかというと、戦後は世界連邦論者になっていきました。世界というものが一つになっていく、そして究極的には暴力を超えた世界において一つになっていくということで、平和憲法こそを擁護すべきである、というふうに彼は主張し始めることになります。

下中弥三郎という人は、ころころと転向した人だ、というふうに言われてきました。大宅壮一が、彼は得体の知れない怪物だ、というふうに言っています。時にアナーキズムであったり、時に農本主義であり、時に自由主義者で、時にファシストである。何だ、この人は、得体の知

れない怪物だ、というふうに大宅さんは言っていますけれども、私は、もうちょっとみたほうがいいと思うんですね。

彼は一貫していたと思っています。それは何かというと、人間の力によってユートピアが完成する、そういうようなある種の理想主義、これに基づいて何かを設計的にやっていくという発想において、彼はずっと一貫している。そういう人物だったんだろうと思います。保守はこういうものを嫌うのです。こういうものを嫌う、ここから距離をとれ、永遠の微調整である、何で人間はそういうものに飛びついてしまうのか、自分たちの不完全性というものを謙虚に見詰め直すところから、微調整をし、合意形成をしていくという、この時間のかかるものに英知を見出そう、これが保守だろうと思います。

ですから、戦後民主主義と戦争中の八紘一宇というのは、基本的に同根の存在であるというのが、彼らが共通して考えた認識というものでありました。

また田中美知太郎さんの言葉です。「戦中のわたしの立場は何だったのだらうか。戦争をすべて悪であり不義であるとして、これに反対したことに絶対的な正と善を見るといふ、戦後の一時期の感情からすれば、わたしもことあらたに自分自身を吟味する必要はなかつただらう。多くの反戦自慢話や手柄話は、そのやうな前提から誇りを持って語られたのである。しかし戦争については、戦中戦後の価値判断は、裏返へしされた同一心理の産物であつて、わたしは戦中と戦後を通じて、どちらも信じないのである」。これが田中美知太郎の感覚というものであった。これが決定的に忘れられているのが現在の保守の問題ではないかと思うわけであります。

竹山道雄の進歩主義批判

さて、次に竹山道雄という、ほとんど田中美知太郎と同世代、同い歳の人物をみてまいりたいと思います。

私は、この竹山さんも非常に尊敬をしている方であります。竹山道雄はドイツ文学者であり、一高・東大の、戦中、戦前は一高の先生をしていて、戦後、東大教養学部になりますからそのまま教養学部の先生をされていた。しかし、早く東大から去られて、文筆をされていたわけですけれども、1955 年、敗戦から 10 年たったときに、雑誌『心』を――『心』という雑誌も非常に重要なんですけれども、この『心』に「十年の後に」と題した論考を連載しました。これが改題をされて、『昭和の精神史』という本となって出版されます。現在も中公クラシックスに入っていると思いますが、これも名著だと思います。若い学生には、これとか田中さんのものを読みなさいと言って読ませているんですけれども、竹山さんは、まず冒頭で何を言っているかというと、進歩主義的な歴史観に対する強烈な批判をやっています。つまりマルクス主義的な歴史観、唯物論的な歴史観に対して強烈な批判をしました。

このころ、1950 年代の歴史学者は、マルクス主義というものを無謬の存在とし、日本の時代区分がマルクス主義のどこに当てはまるのかという論争をやっていたのです。

つまり、講座派と労農派の議論というのは、明治維新は、これはブルジョア革命なのか、あるいはそうではないのかという議論です。もちろんブルジョア革命の後にもっと本当の革命がやってくるわけですけれども、それをマルクス主義のどの段階に位置するのかということを議論し、現在というのはまだまだ革命の前提段階にしかなっていない、そういうような位置づけをしていた。こういうような演繹的な歴史観には何の意味もないということを、竹山さんはこのころから鋭く見抜いていた。

その中でも彼が痛烈に批判しているのが、ハーバード・ノーマンです。ノーマンはもちろんマルクス主義に非常に大きな影響を受けた人物で、日本のファシズム的なプロセスに対する批判をマルクス主義的な見地から論じた人物であります。ノーマンは、要するに昭和の軍国主義というのは封建制というものが日本においてずっと続いているからこそ、ああいうようなものが起こったのだ、日本においては革命がちゃんと行われていないからこそ愚弄な軍閥

政治が起きてしまったんだ、そういう論調をノーマンはとったわけです。昭和の軍国主義というのは、「封建制の温存たる政党・財閥・官僚・軍閥から成る『天皇制』の申し子」であって、疲弊の本質というのは革命の不履行にある、これがノーマンだったのです。こういう歴史観に対して竹山は猛烈にかみついたわけであります。おかしいじゃないか、と言うわけです。

革新勢力による「天皇制」乗っ取り

何でおかしいじゃないかと言ったかというと、実は 1930 年代のファッショ的な運動というものを担った人たち、つまり 5.15 や 2.26 を起こした青年将校たちは、まさにこの政党や軍閥や官僚をたたき直そう、これを倒そうとした、そういう革新勢力だったのではないのか、というわけです。「政党・財閥・官僚・軍閥こそ、まさにファッショ的革新勢力の呪いの的」だったのではないか。

つまり、超国家主義、1930 年代を大きく席捲したこの超国家主義者たちというのは、「一君万民」の国体を根拠とした階級社会の打破を訴えた人たちであり、極めて革新的な人間であった。近衛内閣の周辺にいたのも革新官僚であった。そして、軍の主導権を握った、時代を大きく変えていった大川周明にしろ、北一輝にしろ、彼らもやはり大きく影響されたのはマルクスであるわけです。

非常におもしろいのは、このころの右翼というのは、マルクス主義者だということです。満川亀太郎という人が『三国干渉以後』という非常に長い丁寧な回想を残してくれているので、このころの右翼のことがよくわかるんです。満川と大川というのは、後に猶存社という団体をつくり、それが昭和維新運動の底流をつくっていくことになるんですけれども、満川亀太郎は 1917 年に起きたロシア革命を大礼賛しているのです。これこそすばらしい、これによって大きく世界は変わる。それに賛同したのが大川周明であり、下中弥三郎なのです。

こういうような革新というものが世界中で行われることによって、普遍的なところへと世界はむかっていく。自分たちは、そのなかで日本を主体化させてやりたいんだ、マルクスはまだ限界がある、それは日本的精神において世界というものが統一されなければならない、そんな革命が行われなければならない、だから、クーデターをやろう、という話に彼らはなっていくわけであります。こういうものを竹山は、嫌で嫌で仕方がなかったのです。何だ、この革新主義者たちは、何で右翼のやつたちがマルクス主義者なんだ、というふうに彼は思っているわけです。

北一輝が一番最初に書いたのも、『国体論及び純正社会主義』です。こういう国家統制経済というものを考えた極めてマルクス主義的な観念を持ったのが北一輝でありました。この辺の右翼がなぜ革新勢力だったのかということについて、思想史上の位置づけというのが戦後民主主義的な歴史観の中では弱かったのではいかと私は思っております。

竹山はどういうふうに考えたのか、つまり、昭和の疲弊というのは「ファッショ的革新勢力」による改造志向、こういうものこそが実は大きな問題だった。もっと踏み込むと、竹山は、1930 年代から 40 年代の疲弊というのは、革新勢力、つまり国体を名乗った革新勢力がやったと彼は思っているわけです。そんなものに自分は与しない、と彼は思っている。

そこで起きたのは何かというと、革新勢力による「天皇制」の乗っ取りが起きたんだ、というふうに竹山は主張しています。北一輝などはまさにそうだと思いますけれども、青年将校によるさまざまな暗殺は「イデオロギーによる直接行動」であり、「そのイデオロギーとは、ブルジョアジー体制を倒して国家社会主義を立てようという、一九二〇年、三〇年代の世界に共通の現代的なもの」であるというふうに竹山は言っています。見事な分析をよく戦後すぐにしているなと思い、私はそのとおりだろうと思っています。

この革新イデオロギーと天皇制を結びつけ、これまでの秩序を反転させる、こういう改造論者たちが構成した論理が 1930 年代の超国家主義ではなかったのか。

天皇というのは、やはりここで二重の性格を持っていたというふうに竹山は主張しています。一つは、天皇機関説のような、美濃部が言ったような機関説的な性格と同時に、統帥権を独占している性質のものとして二分化される、というわけです。

そして、この「統帥権的性格」で捉えられた天皇は、「御親政によって民と直結して、平等な民族共同体の首長であるべきであり、国難を克服する、国家の一元的意志の体現者」であるというふうにみなされた。これが昭和の大きな問題だった。つまり、竹山は機関説論者であるわけです。そういうものが明治の一つの英知だったではないか、しかし、それがどんどんとずれていき、特にロンドン海軍軍縮条約以降、統帥権干犯という大きな問題が出てきました。これに対して、天皇観が革新勢力に乗っ取られた、と竹山は考えているわけです。

1930 年代以降の対外的な危機の拡大というものは一体何だったのか。それは「統帥権的性格」の天皇観が支配的になり、統帥権を手がかりとしてヘゲモニーを獲得しようとした軍人たちが成功を収めるようになったこと、それにほかならないではないか。革新派の軍人は「国体の本義」を手中におさめることによって、「権威を確立」していった、これも田中美知太郎さんと同じことを言っているのだろうと思います。

超国家主義は封建制の残存なんかでは全くない、というわけです。重臣・政党・財閥・官僚・軍閥による「天皇制」の続きでもない。つまり、明治の続きなんかではないというのです。そう見えたのは、「同じ天皇が別の性格のものとして活用されたから」にほかならない、と竹山さんは言っています。ここで大きく変わった。革新勢力によって天皇が乗っ取られ、明治の穏健な国家体制が崩壊していったのではないのか、と竹山さんは言っているわけであります。

「日本をファッショ化したのも、経済的階級以外の権力だった。それは、ある団体精神によって憑かれ、組織と武器をもった一群の人々だった」。それは、革新的な青年将校や、超国家主義者たちにほかならない。竹山さんは、保守的観点から昭和維新派のイデオロギーを彼は批判し、その革新的な側面を非常に強く断罪した人物でありました。

そして、この統制を失った国家というものは、悲劇的な末路をたどる。「それにしても、あの歴史を回顧して怪訝にたえないのは、かつてあれほども慎重周密だった日本が、どうしてあのように大局の目途もなく戦線を拡大させてしまったのだろう、ということである」。何で冷静沈着なあれほどの日本人が、何でこんな、綿密な計画も作戦もなく戦争をズルズルと拡大させてしまったのか、何で日本人はあの時代にこれほど劣化してしまったのか、と彼は思っているわけです。

その原因というのは、革新イデオロギーによって天皇制が乗っ取られたことにある、と彼は考えました。ファッショ的革新イデオロギーが世論の支持を集め、数多くの便乗者を生み出し、それに抗しがたい空気をこの中で生み出していった。この悪循環が拡大し続け、誰もが抗することのできない状況、これが生み出されてしまった。

結果、日本は国家としての統制をとることができない「世の中全体が半ば発狂」した状況に陥ったというふうに、非常に厳しい言葉で、昭和の前期の日本は発狂していたというわけです。

日中戦争はアジア解放ではなく侵略

では、どういうふうに発狂していたのか。その最たる例が、彼は、日中戦争、支那事変であると言っています。支那事変ほど、日中戦争ほど、無計画で無統制なものはない、と厳しい批判をしています。戦争を解決するために戦争を拡大するという悪循環、これがまさに日中戦争の拡大というものにほかならないではないか。

「あの日華事変のあいだ、侵略をしていた日本人は――ここで明確に竹山は日中戦争を侵略であるというふうに言っていることも重要なポイントであります――主観的には侵略をしているとは感ぜずに、防禦をしていると感じていた。もし勝たなかったら亡国だ、という恐

怖と焦燥をもっていた。この聖戦を完遂しなければこれまでの成果は全部空しくなる。今までたくさんの人々が英霊になり国費を費やしたのに、いまさらどうして犠牲をむなしくすることができよう……！それは致命的な悪循環だった」。「軍事と外交がばらばらで統一した国家意思がなく、強力な非有機体と化した軍隊が無限の大陸で戦争したのだから、国はまさに亡びるべくして亡びた、というべきであろう。そして、これはノーマン氏が想像したのとはあべこべの姿であり、厳粛な封建的精神や階層支配が時代によって崩れたからこそ起こったことだった。国全体がアモルフなものに解消したのだった」と言っています。

一連の戦争というものを彼は「アジア解放の聖戦として正当化すべきではない」と強く主張しています。

アジア諸国の独立は「日本の意図からよりもむしろ歴史の成行き」であって、日本の軍事力による植民地支配からの解放という歴史観は成立し得ない、と保守派の竹山道雄は強く主張しているわけであります。

右派による聖戦的な史観、一部に残っているこの右派の聖戦的な史観は、「一つの観点によって歴史の全体を体制化しようとしたもの」であり、左翼の「上からの演繹」と同じ歴史観である、それの裏表の存在にほかならない。これも非常に強い炯眼だと思います。あいつらは同じやつだというふうに言っているわけですね。こういうのも竹山さんの持っていた歴史観でありました。

軍部と戦後左翼の発想は同じ、山本七平

最後にご紹介したいのが、やはり山本七平という人物であります。山本さんは、戦争に行き、非常に厳しい戦争体験を体験され、そして日本に帰ってこられた方でありました。

山本七平さんは 1970 年代に相次いで戦争体験について語られました。『ある異常体験者の偏見』、あるいは『私の中の日本軍』、『一下級将校の見た帝国陸軍』という著書を相次いで発表することになりました。

山本さんが、最初に『ある異常体験者の偏見』の冒頭部分で書いていることですが、彼はこういう戦争体験を書いておかなければいけないと感じたのが、『文藝春秋』に載った、ある左派の人の文章に触発されたからだと言っています。

それは、1972 年 11 月号の『文藝春秋』に載った新井さんという方の文章でした。これに対して猛烈に山本さんは怒りを表明するところから、この『ある異常体験者の偏見』は始まっていきます。新井氏は、次のようなことを言っています。

「強大な武器を持っていた日本がなぜ中国に敗けたのか。それは偶然に負けたのではなく、負けるべくして負けたのである。それは、なかば、植民地化された中国を、独立した近代国家にしたいという中国の民衆のもえたぎるエネルギー、いいかえれば反帝・反封建の道を進んできた中国革命の力量によって負かされたのである」。

これに対して山本七平はカチンときたのです。これが非常に鋭いところなのです。

山本さんは、この基本的発想と、それから思考の様式そのものは、あの時代の軍部と少しも変わっていないではないか、というふうに言いました。この戦後左翼こそが、自分が若いときに苦境をずっと味わってきた軍部の発想と同じである、だから、これは許せないというふうに彼は思い、自分の軍隊経験というのをしっかりと書いておかなければいけない、それがわからなくなってしまっているのではないか、と彼は述べ始めるわけです。

つまり、新井氏の文章のこの「日本軍」を「米英軍」に置き換え、「民衆のもえたぎるエネルギー」を「精神力」に置き換えると、「強力な武器をもった米英軍を精神力で圧倒できる」と鼓吹した日本軍の思考様式と同じものになるのではないか。精神力によって勝ったんだ、勝てる、そういう非合理的な発想、こういうものが左翼の言っている革命なのだったら、それは大東亜戦争を無謀に始めたあの軍部と同じ思考様式である、私はどちらも信じないし、それ

が若き日の私を奈落の底に落としたあの思考様式にほかならない、こういう発想が多くの日本人を殺し、日本を破綻に導いた、私はそういうものに全く与することができない、というのが山本七平の保守なのです。

戦後左翼の中国礼賛論というのは、まさに戦中の「軍人的断言法」と同じであり、両者は同根の存在である、と山本さんは主張するわけです。砲兵隊本部の「走り使い」をして、文字通り命がけで戦わなければならなかった相手は、実はこの思考様式であり、「変だ、変だ」と思い続けていたこともこれであったという、実に苦々しい思い出がよみがえってきたのです。

実は自分が戦っていたのは英米ではなかった、こういう軍部の思考様式とずっと自分は戦い続けてきたんだ。戦後左翼をみることで久しぶりに思い出した。苦々しいあの時代を書いてみなければならない、これが山本七平なのです。これも忘れられている。

山本さんは、「軍人的断言法」ということを繰り返し使っています。これは合理的根拠のないものです。そして、「軍人の精神力」にせよ「民衆のもえたぎるエネルギー」にせよ、それらはすべて「不確定要素」でありながら、武器・兵力・補給力・資源などの「確定要素」を凌駕する存在とみなされている。

兵力がどれほどある、あるいはどれだけの連隊が向こうにいる、そんなことよりも精神力というものの方が上回る存在として語られる。戦争で、やっていいのか、やっていけないのかという決定が、合理的な戦力などには基づかずになされていたというわけです。結局、精神力というものに基づいている以上、戦後左翼の革命論と、大東亜戦争を引き起こした軍部というのは同じものに依拠しているのではないか、と彼は言い放っているわけです。

結果、論理に基づく議論は成立せず、大勢は「不確定要素」をスローガンにして大声で叫ぶ者にひきずられていくという結末になります。

次の文章も厳しいです。

「なるほど、叫びたい人間は叫べばよい、言いまくりたい人間は言いまくればよい。繰り返し繰り返し、語りたい人間は語るがよい、それですめば別に実害はない――しかし、その叫びや大声に否応なく規制された人間はどうなるのか、そこに何が起きるか。『精神力』対『武器』という発想で、かつて大声をあげた方々は、そのことを考えたことがあるのか。それは、人間の能力を極限まで、いや極限以上に、水増し評価し、その評価通りの行為を各人に要求し、強制するという結果になるのだ。それは、それをされている人間にとっては地獄の責め苦なのである」というふうに言うわけです。

精神力によって、英米なんていうのは突破できる、あるいは革命というのは民衆の燃えたぎるエネルギーだ、そう言われて規制された、その中にいる民衆というのは一体どうなるんだ、それこそが地獄である、と彼は言うわけです。

日本軍におけるリアリティの決定的欠如

しかも、この人たちに決定的に欠如しているのがリアリズム、リアリティという問題である。彼は兵隊にとられて、兵に入ったときに、一瞬にしてこの日本軍にはリアリティというものが最も欠如しているということを見抜きました。

彼は近衛野砲兵の連隊に配属されましたが、入ってみてびっくりしたのは、連隊が二個大隊のみの部隊だったことであります。通常、帝国陸軍の連隊というものは三から四の大隊から編成されているはずで、二個大隊の部隊を「連隊」と呼ぶことは本当はおかしいわけです。しかし、軍人たちは、「二個大隊」とは言わず、「連隊ただし一個大隊欠」という表現を使用して大きくみせようとしていた。過大な言い方を繰り返ししていた。「あっ、これはうそだな」と二十歳の山本七平は軍に入った瞬間に見抜くわけです。

この現実を目の当たりにしたところから、彼は帝国陸軍に疑惑を抱き始めました。誇大表現を使いたがる「精神構造」がどこかにあるぞ，軍部内部にはびこる「事大主義」がここに典型的にあらわれているのではないのか、というふうに彼は思い始めました。

彼は予備士官学校で教育を受けていましたが、戦局が厳しくなるに従って、どんどんと教育期間は圧縮され、見習い士官のまますぐに戦地に送り出されることが常態化していくことになります。教育はすべて中途半端なままに終わり、実戦で使い得るような十分な技術を身につけないまま、多くの若者が戦地に向かっていくことになりました。猛スピートの詰め込み教育によって多くの人たちは思考力を奪われ、立ちどまって現実を認識する余裕をどんどんと喪失していくということになりました。

「思い返して見れば一切にリアリティがなかった。すべての人々が故意に現実に背を向け、虚構の中で夢中で何かを演じ、それによってそれが現実だと信じようとしているように見えた。立派な名称は至る所に並んでいる――しかしすべては欠、欠、欠」、これが日本軍であった。勇ましいスローガンや断言の吹聴というものは、実は軍部の自信の喪失、欠如の反映であったに違いない、これが山本七平がみたものでした。

時代の「空気」が日本の最重要の判断基準

そして、この先に、山本七平の代表作、名著が生まれることになります。それは『空気の研究』です。彼は、結局のところ、この時代を支配していたものは、実は軍部ですらない、と言うのです。何が支配していたのか、それは空気である、というふうに言いました。

多くの軍事の専門家たちまでもが、データなどの客観的な科学的な根拠よりも時代を支配する「空気」、これを判断の基準としていた。最終的な決定の正当性は、すべて「空気」に委ねられていた。すべての決定というのは空気だったのだ、これに抗うことができなかった。

日本の軍部も、あるいは多くの人たちも、戦争が始まる直前にさまざまなデータを分析し、対米開戦をやると負ける、というのはわかっていたわけです。しかし、やるわけです。なぜやるのかというと、それが「空気」の決断にほかならなかったからだ、というのが山本七平が言っていることです。

「戦艦大和の出撃などは“空気”決定のほんの一例にすぎず、太平洋戦争そのものが、否、その前の日華事変の発端と対処の仕方が、すべて“空気”決定なのである」。日本において、最も大きな権威、権力を持つのはこの「空気」である、というのが山本七平さんが言っていることです。

しかも、山本七平は、この空気を支配している帝国陸軍というものと、当時、1970 年代初めですから、おおよそ赤軍派のような左翼過激派が実に似ているということをここの中で繰り返し主張しております。

私がこれは非常におもしろいと思ったのは、1972 年に横井庄一さんが出てこられるわけですけれども、このときの横井さんの心情というものを、山本七平は、実は赤軍派のメンバーとよく似ている部分があるのではないのか、と主張しています。どういうことでしょうか。

「横井さんの、出て来た直後の恐怖を、単に軍法会議への恐怖と解すべきであろうか。そうは思えない。何か小さな失策をした場合、たとえ公の制裁（たとえば重営倉のような）がないことはわかっていても、内務班で待ちうけている私的制裁を思っただけで足がすくむような思いをしたのは、私だけではあるまい。帰れば罵声と殴打、時には半殺し――当時の軍隊語でいえば「デコデコになるまでツキ上げてやる」という状態が確実に待ちうけている場所へ、重い足を引きずって戻っていったあの時の恐怖が、横井さんにも潜在的にあったように思えてならない」。

水木しげるさんも同じですよね。戦争中、ボロボロになって生き延びて、部隊に戻ると罵倒されるわけです。場合によってはリンチされるわけです。「何で帰ってきたんだ、おまえ」と言われる。これが横井さんは怖かったのではないのか、というわけです。

横井さんが何で 1972 年まで出てこられなかったのか、横井さんがそのとき恐る恐る出てきた、そのときの恐怖は、何か軍法会議にかけられるとかではない、リンチに遭うという、あの感覚だったのではないのかというわけです。そ

れは赤軍派の中において起きた、あのリンチ殺人というものと何が違うのだ、あの恐怖というものを私は目の当たりにしたとき、あの帝国陸軍を思い出した、というわけです。

だから、あの過激派と、日本の大東亜戦争を戦った帝国陸軍は同じ存在にほかならない、これが保守派山本七平の主張であるわけです。これが非常に重要です。

「横井さんの恐怖」は「赤軍派のリンチの恐怖」と同質のものである。リンチへの恐怖は、過剰なゴマスリ競争を、実はその場その場で生み出す。結果、思考は徐々に停止し、命令への条件反射が日常化していく。倫理観の完全喪失というものが起こり、私的制裁が横行していく、これが軍部の中で起きた、戦場で起きた日本軍の実態と、そして、あの赤軍派の中で起きたリンチと同じである、というふうに彼は言うわけです。

戦中の日本軍を引き継いだ存在こそが実は戦後左翼にほかならないのではないのか。同時代の左翼に対する否定的態度というものは、彼の戦中の軍隊体験に対する嫌悪感というものに対する非常に強い思いというものに依拠していたということであります。

こういうような、主体的に大東亜戦争を経験した人たちの多くが鬼籍に入って 20 年ほどがたとうとした今、保守派がなぜあの大東亜戦争を肯定しているのか。おそらくあの方々が生きていたら、「ばか言え」と言ったはずです。「おまえたちは何を考えているんだ、どういうことを考えているのか、もう一度革新的な人間になりたいのか、それはあなたたちが忌み嫌ってきた戦後左翼の思考様式と同じではないのか」と言ったに違いないと思うわけです。

こういうことを私たちは忘れてしまっているのではないのか、この戦争を主体的に生きた保守派の矜持というものをもう一度現在の保守派に対して向けていくというのが本当の保守というものを考える、あるいは歴史認識を保守から考えるというときの一番重要な視点というものではないのか、というのが今日、私が申しあげたかった趣旨でございました。

以上です。どうもありがとうございました。

保守における断片的熱狂

司会　非常に参考になりました。私から 1～2 点、お尋ねしたいと思います。

田中美知太郎、竹山道雄、山本七平など、かつての保守派は、軍部や戦争に対する嫌悪を持っていたとの指摘でした。

しかし、彼らの次の世代の保守派と呼ばれる人たちの中で、ここ 20 年ほど、大東亜戦争肯定論などが持ち上がっています。こうした保守の変容はなぜ起こったのでしょうか。その辺はどう分析されますか。

中島　保守の変容という問題は、いろんな観点から論じることができると思いますが、私は、妙なねじれ関係が保守と左派の間に戦後長くあったことが起因していると思っています。

保守、左派の両方の人たちは、自分たちはマイノリティーだと思って生きているんですね。私が思想的に非常に大きな影響を受けたのは西部邁先生ですけれども、西部先生の周辺の保守派の論客の人たちは、戦後の言論空間というのはほとんど左翼に牛耳られている、朝日新聞しかり、ああいうところが、ほとんどの言論を担っている。あるいは大学のアカデミズムをみてみろ、ほとんどが左翼学者ではないか、自分たちは言論する空間すらほとんど与えられてこなかった。保守は、そういうような左翼が牛耳ってきた教育、言論、あるいはアカデミズムに対する抵抗運動であり、自分たちはマイノリティーであるという意識を非常に強く持っていらっしゃる。

一方で、私は『週刊金曜日』という雑誌の編集委員をしていますが、そちらにいる左翼の人たちは、俺たちはずっとマイノリティーだと思っているというんですね。なぜかといえば、政権はずっと自民党が一党優位体制を続けてきた。その政治体制の中で自分たちは排除され、自分たちの声なんてどこにも反映されていないというわけです。だから、それに対する抵抗運動をやってきたんだ、という意識が左派の側にも非常に強くある。両方が相手を大きくみて、

自分がそれに対して抵抗しているんだ、そういう意識を非常に強く持ってきた。

私にとっては、両者は、共犯関係というか、パラサイトにみえてしまうんです。ですから、反対することがアイデンティティになっていく傾向がある。平和憲法護持が左派の一つの主張であるならば、右派は、憲法をちょっとでも変えたら俺たちの勝ちだとか、私には意味がわからない論争がずうっと続いていくわけです。憲法そのものがどうなのかということを論じ得ない変な言論空間ができていく。

そうすると、保守の側はどんどん断片的な熱狂をやり始めるんです。靖国に行けば保守だとか、よくわからない話になっていくわけです。ヴィトンのバッグを持っていればセレブみたいな、そんな断片的熱狂というものが起きてくるんですね。

こういう非常に不幸な状況がずっと続いてきた。その背景には冷戦という問題もあったのかもしれませんけれども、それが保守のフォルムというものを保守の論理自体から考えることを失わせた。つまり、左翼に対する抵抗とか、簡単に言うと、反左翼という概念が非常に強くあり、全世界的に言うと、反マルクス主義ですね。反ソ連という問題が非常に強くあったために、そこに引きずられたもの、左派に対するアンチテーゼが保守であるかのようにみえてしまった。

だから、バーク以降の保守思想が振り返られることが少なくなってしまったのではないか、と私には思えて仕方がないです。

リベラルの原意は違いを認め合う「寛容」

司会　その議論の裏側に、リベラルの衰退があると思うんですが、その辺はどんなふうにごらんになっていますか。

中島　リベラルという概念を、私は、もう少し定義し直したほうがいいと思っています。リベラルイコール左翼だというふうに思われがちですが、思想史上はそんなことはまったく言えないです。左翼というのは全然リベラルではないんですよ。ソ連をみればわかるように、あるいは北朝鮮をみればわかるように、あるいは中国共産党をみればわかるように、前衛という優れた人間によって社会をリードできる、だから、おまえたち、大衆は従え、という部分が非常に強くあるわけです。

ですから、一定程度の統制経済とか、統制的なものというのを容認するところが左派の中には非常に強くあります。保守はそれを嫌ってきたわけです。

本来、リベラルというのは、どういうところから思想史上生まれてきたかというと、ヨーロッパにおける三十年戦争の結果なんです。三十年戦争の結果、ウェストファリア条約が 1648 年に結ばれますが、この三十年戦争というのは、実質上の宗教戦争です。つまり、これはキリスト教内部のプロテスタントとカソリックの争いでありまして、これを延々やって血で血を争う凄惨な光景がヨーロッパにあったとき、「もうやめよう、何とか秩序を取り戻そう」というのがウェストファリア条約だったわけです。

そのとき、実はリベラルという概念が生まれてくるんです。どういうことかというと、自分と信仰や思想が決定的に違う相手がいる、まずはそのことを認めようではないか、そして、その相手に対して、まずは寛容になる。違いを認め合おうではないか、そのうえで合意形成をしていくという体制をとろうではないか、ということです。

つまり、「リベラル」のもともとの原意というのは「寛容」という意味です。辞書でぜひ「リベラル」という言葉を引いていただきたいんですが、そうすると、リベラルには重要な意味として寛容という意味が出てまいります。この寛容という意味から、「自由」という観念が結びついていくわけです。

つまり、個のほうからみるならば、権力によって、それぞれ個人の内面の問題、思想の問題、あるいは宗教の問題については他から土足で干渉されない、そういう自由がリベラルへと変容していくわけです。リベラルというのは、ですから、自分と考え方の異なる人間に対してある種の寛容性と多様性を認める、そういう境地

がそもそものリベラルであるわけです。

そして、このリベラルというのが、フランス革命期に大きく変容していくんです。これが啓蒙主義のようなものにどんどん変容していくことになり、リベラルのフォルムはゆがんでいくわけです。私は、元の「寛容」という意味にリベラルをちゃんと戻すべきなのではないかと思います。

そして、実は保守というのは、そういうリベラルを擁護する感性が非常に強いものなんだと私は思っています。ですから、リベラル・コンサバティブ、「リベラルな保守」というのが私の立っているところなんです。

左派の強権的で独断的な政治に対して、保守は人間の理性の無謬性というものを疑っているものですから、当然、自分が主張していることも間違えているかもしれないという、さまざまな能力に対する過信をいさめるというところがあるわけです。とすると、自分が間違えているかもしれないと考えながら議論している以上、他者の言うことには耳を傾けようというふうになるわけです。

独断的な決定というものは必ず過ちを犯してしまう。それは理性に対する思い上がりを生み出してしまう。だから、少数者であろうと、それに「なるほどな」と思うことがあれば、それの意見を取り入れながら合意形成をしていく、それが議会制民主主義というものの本質であり、だから、多数者の専制になってはならない、というのが保守が考えてきたことです。

民主主義というのは、えてして多数派の専制政治になってしまう。トクヴィルが言ったことですけれども、それを避けるためには、具体的な個々のそれぞれの議論とかパブリックなものですね、西部先生は、保守というのは熱狂が禁じられている、保守というのは他者との葛藤に耐えながら合意形成をするプロセス、それを喜びとする人間のことである、というふうに言っています。こういうものが保守である以上、極めてリベラルな観念というものが宿っているのです。

西部先生も、20 年前には『リベラルマインド』という本を書いていらっしゃいます。こういうものが基本的にはリベラルなんですが、何かリベラルイコール左翼というふうにされてしまい、そして、左翼イコールだめだから、リベラルはだめだ、みたいな話になっている。これは、本末転倒です。

ですから、いま重要なのは、本来の保守と本来のリベラルというのを取り戻した「リベラル・コンサバティブ」というものの復興ではないのか、というのが私の考えているところであって、そこをしっかりと定着させたい。

ですから、もともと私は自民党の支持者で、自民党の宏池会の人たちに非常に敬意を持ってきたんですが、そういう勢力がどんどんなくなっていき、むしろ民主党のなかに、俺たちが宏池会を継ぐんだみたいなことを言う人たちがたくさん出ている。政治の全体が、保守二大政党、「リベラルな保守か、行き過ぎた右翼か」みたいな争いになって、大変な時代だなというふうに私は思ったりしています。

社会的不安が「ネット右翼」の背景に

司会　昨今のいわゆるネット現象に関連して、「ネットと保守」といいますか、ネットの思想潮流への影響についてどうお考えですか。

中島　「ネット右翼」という言葉が出てきますが、ネットで非常にひどい言葉をまき散らしている人たちは若者だと思われがちですね。しかし、多くの社会学者たちがさまざまな調査をした結果、あれを書いている人間は若者ではなく、中年男性なんです。40 代から 50 代の男性が中心という結果が、いろんな統計でどの分析をしても出ています。

しかも、低所得者でもないんです。データによると、高学歴者なんです。例えば田母神さんの本を読めるって、基本的にある程度の学歴がないと難しいです。高学歴で、平均年収よりも高収入の人です。ただし未婚者の男性が多いです。

つまり、経済的あるいは学歴的にはある程度満たされているけれども、根源的なところで何か承認欲求が満たされていないという中年男

性というのが結構いるということです。

それと同時に、いまこれだけ社会が流動化している中で、不安を抱いているのは格差社会の底辺にいる人たちだけではなくて、実は、案外上の方にいる人たちも実は非常に不安定なんですね。なぜなら、株価が一気に暴落するかもしれない、3 カ月後の社会というのがよくみえないという非常に不安定な社会に突入しているわけですから。政府が年金を使って平気で博打をするような、そういう時代は、金持ちであろうとも、いまの地位がすぐに終わってしまうかもしれないと不安に思っている人たちが非常に多いんです。こういう不安の強いはけ口というのが、どうもネット右翼というものの心性につながっているようです。

全体をみていかないと、ネット右翼問題はみえてこないんじゃないか。若者の貧困問題が原因だと言われがちですが、データを調べていくと、実はそうでないというのがみえてくる。案外、日本のおじさん問題だということなんです。これを考え直さないといけない。僕もおじさんの領域に入っているので、ああ、自分たちも不安なんだなというふうに思うところです。

大学だって、どんどん雇用が有期制になっていき、5 年契約とかで更新されていく。そういう契約になっていくと、やはり不安ですよね。そういう中からネット右翼というものが出てきている、こう考えたほうがいいんだろうなと思います。

アカデミズムへの反感が安倍政権を推進

司会　どうもありがとうございました。

それでは、会場の方から質問を受けたいと思います。

質問　新聞記者をやめた後、10 年ぐらい大学で教えましたけれども、安倍政権と日本のアカデミズムの世界とが広範囲に全面対決状態になっている気がしますが、どう思われますか。

中島　私は、アカデミズムの人間が安倍内閣を批判すればするほど、安倍内閣の支持が上がるという現象が起きるんだと思うんですね。

橋下徹という人と戦って、私はよくわかったんですが、「あの人はバカ学者」とか、「学者なんて全然役に立たないんですよ。あいつらは何の実務経験もなく、研究室にこもって何か偉そうなことをくっちゃべっていて、あいつら、市長をやれるんですか、やってみろ」という橋下さんの発言が多くの人に受けるんですよ。それは痛快ですよね。私も報道ステーションに出てコメンテーターをやっていますけれども、学者面をして、そして高いところに立って物を言っている人間に対して橋下さんはズバッと、「あんな人間、役に立たないんですよ」と言う。そうすると、大阪の人たちは、「おお、よく言ってくれた」となる部分があるわけです。

アカデミズムの側の私たちの権威主義というのは、自分たちでよく反省しなければいけない点があると思うのですが、それへの反感が安倍内閣に対する推進力になっている部分があると思います。そのことを私たちもよく考えなければいけないなと思っています。ですから、アカデミズムと全面対決すればするほど、安倍さんは支持を得るんじゃないですか。

質問　確かに今日、挙げられた保守の言論人の方々は大東亜戦争を否定していると思います。しかし、保守の政治家まで対象を広げると、先日、記者クラブに来られた奥野誠亮さんは昔の時代を非常に大事にするような話をされましたし、安倍首相の祖父である岸信介さんの位置づけはどうなるのでしょうか。戦後の自民党は、憲法改正を言ってきました。保守における懐古についてはどう考えておられるのでしょうか。

中島　過去を保守はどう捉えるのかというのがここで非常に重要だと思います。復古主義者と保守の違いは非常に重要なんです。

過去のある一点に戻れば、すべていいんだという、そういう原理主義的な態度を保守はとれないんです。それは申しあげたとおり、過去の人間も不完全であったからです。しかし、私たちにとって言葉にしろ、さまざまなものは過去からやってくるわけです。保守にとっての過去というのは、年代の積み重ねのようなものなんです。ある一点において絶対化できるものでは

ない。ですから、過去のある一つの部分を抽出して、これが日本的な精神だ、みたいなことは保守は言えないんです。

大きな流れの中で、取捨選択され、歴史の風雪に耐えてきたものが伝統というものになってくるわけです。ですから、特定のあの時代のあれが正しかったんだという人間は、保守ではなくて復古主義者ということになると思います。私は福田恆存さんに非常に大きな影響を受けましたけれども、福田さんも、そういうものとして伝統というものをみておられるんだと思います。職人の技みたいなもの、あるいは経験知とか暗黙知のようなものの中に保守の精神は宿っている、というのが保守の方々の考えたことであり、私自身もそれを継承したいなというふうに思っています。

ちなみに、私も憲法は変えたほうがいいと思っています。

「リベラルな保守」で保守の立て直しを

質問　復古主義的、反知性的な保守が本当の保守を浸食しているという状況なんでしょうが、これから本来の保守の揺り戻しというか、復権はあるのか。また、リベラルというものが復権してくるのかどうか、そこの見通しを教えてください。

中島　見通しは暗いなと思います。というのは、私が『「リベラル保守」宣言』という本を書いたんですが、それが日本では奇妙だというふうに言われるんですね。僕はびっくりした。「リベラルな保守」というのは、イギリスでは当たり前で、現首相なども言っていることなんです。ヨーロッパでは普通のことなんですが、日本においては、この人は左翼プラス右翼みたいなことを言っているのか、というよくわからない批判が来るんです、政治思想をやってきた人間にとって、これは日本においては決定的に保守というものが理解されていないんだな、それが忘れられてしまっているんだなというふうに思えて仕方ないんです。

ですから、私自身はしっかりと保守というものの立て直しをやっていくべきであると考えています。それにどれだけの人が賛同してくださるのか、よくわからないんですけれども、政治勢力として、私のものをよく読んでくださるのはほとんど民主党の方なんですね。「先生の書いていることで、わが意を得たりと思った」とよく民主党の人に言われます。そういう二大政党制になってきたのか、というふうに思ったりします。どうなんでしょうね、民主党は。頼りないですね、ちゃんとビジョンというものがなかなかないですよね。

「民主党は、タクシーに乗って、行き先を告げない乗客みたいだ」とよく言っていたんですけれども、どこへ行きたいかわからない。どういう社会にしたいのか、その先がみえないので、ただ右曲がれ、左曲がれといって右往左往してしまうんですね。大きなビジョンがないと、具体的な政策というのは成り立たないんですけれども、その部分がちゃんとできていない。

ですから、本当にそれに対する対抗勢力というのができるためにも、民主党に頑張ってもらわないといけないわけなんですけれども、うーん、大丈夫ですかねえ。

質問　戦後の保守合同では、資本主義的な考え方の人も、修正資本主義的な考え方の人も一緒になって自民党ができて、社会保障制度が整備された。それは、戦前的な保守ではない。保守の概念がまだ明確につかめないのですが。

中島　日本政治、特に自民党がその文脈において、55 年体制が保守主義に基づいているかというと、怪しいですね。やはり冷戦というファクターが非常に大きかったと思っています。

実質上の自民党の戦後政治、55 年体制は、護送船団方式をベースとした再配分の政治です。ですから、ある種の社民主義的な側面というのが非常に強くありました。つまり、福祉政治であり、特にその再配分というものが非常に不透明な形で行われるというのが自民党の特徴だったわけです。つまり、業界団体を通じ、裏金を通じて、政治家とさまざまな業界が結びつき、そして力を持った政治家のところに金が流され、そして地元においては建設業界に上からお金がおりてくる、だから、地元社会におい

ては、町内会からうまくやっていき、そのヒエラルヒーの中にうまく入っていった人間に仕事がどんどんおりてくるという、非常に不透明な、ある種の再配分というのが行われてきたのが自民党政治でありました。ですから、実質的には極めて社会民主主義的な方向性を多くとっていたんだと思うんです。

これが 80 年代後半から 90 年代にかけて、田中角栄さんもそうですけれども、政治改革でクリーンな政治を、という話になって否定され始めたわけですね。

そうすると、この再配分のシステム自体が崩壊してしまって、いまのような貧困格差の問題、あるいは地方の苦境というのが生まれてくるようになった、というのが実質的な問題なのではないのか。不透明な再配分を透明化しようとしたのですが、それを全部なくしてしまったものですから、再配分がされなくなってしまった、というのが多分現在なんだろうと思うんですね。

ですから、戦後の自民党政治というのは、本当に保守というふうに言えるのか、というところから検討し直したほうがいいのではないかと私は思っています。

仏教の根本は、「我なし故に我あり」

司会　どうもありがとうございました。非常に充実したやりとりだったと思います。

中島さんには、ゲストブックに「我なし故に我あり」と揮毫していただきました。これはどんな意味ですか。

中島　仏教の概念を一言と言われると、こういうことかなと思っているんですが。仏教というのは、本当の私、絶対的な私なんて存在しないというわけですね。それは私に対する執着であり、とらわれである。しかし、じゃ、私はいないのかというと、そうではない。私というのは、「五蘊」という「色・受・想・行・識」という 5 つの構成要素の集まりであり、それは縁によって成り立っている。ですから、いろんな話を聞いたりした後に、自分自身がどんどん変化している、そういう現象として私が存在している。だから、自分探しなんかしても、自分なんていないんですよ、そういうことを根源的に見詰めた瞬間、私というものを受け入れることができるという、すごくややこしい逆説を説いているのが仏教なんです。

私はこれを二十歳のときにブッタのものを読んで、なるほどなと思ったんです。それ以来、私は自分を仏教徒というふうに言うようにしています。トンチのような言葉なので、いろんな有名な方が書いていらっしゃるので、私はちょっとわかりにくい言葉を書いてみようかなと思って書いた次第です。

司会　どうもありがとうございました。

（拍手）

（了）